

月夜三又口舟を泛げつやさんさこうふねをうかぶ

高野蘭亭たかのらんてい

三又中断す大江の秋さんさちゅうだんすたいこうのあき

明月新懸る万里の流めいげつあらたにかかばんりのなれ

碧天向つて玉笛を吹かんと欲へきてんむかぎよくてきふほつ

浮雲一片扁舟に落かうんいつぺんへんしゅうにおち

【作者】高野 蘭亭（一七〇四～一七五七年）江戸時代中期の儒者。名は惟馨（いけい）、字は子式（ししき）、蘭亭または東里と号す。

江戸の人。萩生徂徠（おぎゆうそらい）の門に入り、学識、拔群であったが十七歳のとき失明、徂徠の助言に従って漢詩を志した。晩年鎌倉円覚寺のそばに庵を作り死所としたが、宝暦七年江戸において没す。年五十四、詩作万首に及ぶ。

【語釈】*三 又：隅田川下流の今の清洲橋附近の俗称 中洲があり今戸川が落ち合い 水流が三つに分かれていたという観月の名所 *扁 舟：小舟 扁はひらたい

【通釈】隅田川の河口に近く、今戸川が落ち込むこのあたりは中洲が川を分かち、秋の気配が濃く、明月が中天にかかって、その影をうつし大江の水は萬里に遠く流れていく。興に乗じて澄み切った青空に向かって笛を吹こうとすると、一ひらの雲が私が乗る小舟を迎えるかのようにただよってきた。